

第2問

『伊勢物語』は、在原業平を主人公のモデルとして書かれた物語であり、中世の時代には、業平の実話として享受されていた。【文章Ⅰ】は『伊勢物語』六段の本文で、「男」の連れ出した「女」が鬼に食われるという話の前段と、その「女」が、実は「二条の後」（藤原高子）であり、鬼は「二条の後」を連れ戻した兄弟たちのことであつたという話の後段とからなる。【文章Ⅱ】と【文章Ⅲ】は、ともに近世の時代に書かれた『伊勢物語』の注釈書で、【文章Ⅱ】は賀茂真淵によって書かれた『伊勢物語古意』の一節、【文章Ⅲ】は荷田春満によって書かれた『伊勢物語童子問』の一節である。【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

【文章Ⅰ】

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てアばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きaに來けり。芥河といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらbなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡縁を負ひて戸口にをり、イは夜も明けなむと思ひつつるたりけるに、鬼はや一口に食ひcてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來dし女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

X 白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、(ウ)后のただにおはしける時とや。

【文章Ⅱ】

右二条后てふより下の詞は、後人の裏書なること已にもいへり。いかにぞといはば、凡そ、この文には、業平朝臣の歌を多くあげて、その人のことを作れりとは聞ゆれど、時世・官位をもその人ならずかへて、業平ならぬさまに書きたがへ、そのほかにも古人の名をあらはせしもあれど、いと不義にはぶれたるところには、名をあらはせしはあらず。一興とせし例なしごとなれば、あらはにすべからぬゆゑなり。かく意して書ける記者の心になりてみるときは、天皇の御妻の密事をあらはし、その兄弟たちの御名を

すら挙げて、恥かがやかしまゐらすべきかは。これ、本文の意にたがひたれば、同じ人の筆ならぬこと明らけし。又、後の直ただにはしけるをりてふを、業平をいたはりて書けるなど云ふにや。業平をいたはりて、いかで后をいたはりまゐらせぬにや。この文、たとひ村上(注3)の康保の頃に書くとも、まだ清和(注4)の御時にちかく、二条后もちかき延喜十年(注5)までおはしまし、且つ、その後の生みたてまつりたまふ陽成天皇(注6)も、天曆三年までおはせるを、さださだとあらはして書く人あらんや。且つ、藤原家の権威ますますさかりなるを、そのまぢかき親族のあしきことを、いかなるをこの者の書きあらはさんや。皆その本をしらで云ふ説どもは、云ふにも足らざるなり。……(中略)……又、新古今集(注7)にこの白玉かてふ歌を哀傷の部に入れたり。この撰のときも、奥の詞なき本によられしか、ありしかど裏書なればとられざりしか。これを本文とせば、いかで哀傷に入れられんや。

【文章Ⅲ】

白玉の歌のこと

童子問 「白玉か何ぞと人の」といふ歌を、新古今に「在原業平朝臣」と姓名をあらはし、載せられたるうへは、作り物語ともいひがたからずや。

答 この歌、業平の歌と何の書を以て、決して新古今に入れられたるにや、おぼつかなし。もし、業平の家集といふものありて載せられたるや。かの新古今に、題しらずの歌の列に載せられたれば、確かにこの物語の詞を用られたるにも有るべからず。ただ、おそらくは、新古今には、この物語を用ゐて業平の歌として載せられたるなるべし。僻案(注8)には、この歌、業平の口風(注9)に似ず。物語の作者の歌にて、業平の歌とみえず。すべてこの物語の歌、古歌を引き直し、或いは詞に合はせて作者のよめるうた、あまた有り。然るを、後人、「むかし男」を皆、業平と見るゆゑに、歌の風体を弁(注10)へざるよりなるべし。物語の作者の口風有ることをわきまへしらは、おのづから業平にあらざるをもしるべし。

童子問 この「しら玉」の歌を、新古今に哀傷部に入れられたる義は、いかなることによ。

答 これ、哀傷に入るべきことにあらねども、これは疑抄(注11)にいへることく、実に鬼もくはざれども、哀傷にみるは、真に鬼くひて、なきものにして入れたるものなるべし。これらにて、新古今集に、この歌を業平の歌と定めて入れられたるかと思えたり。しからざれば、この歌、哀傷の部に入るべきことにあらず。

(注) 1 御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言——堀河の大臣は藤原基経(注12)、国経の大納言は藤原国経。いずれも二条の後の兄

であった。

2 裏書——注記。

3 村上の康保の頃——村上天皇の康保年間（九六四～九六八）。

4 清和——清和天皇（在位八五八～八七六）。「二条の後」は、清和天皇の後。

5 延喜十年——九一〇年。

6 陽成天皇——清和天皇の第一皇子。母は二条の後。天曆三（九四九）年没。

7 新古今集——鎌倉時代の初期に編纂された勅撰和歌集『新古今和歌集』。「白玉か」の歌は、『新古今和歌集』の巻八「哀傷歌」（人の死を悼む歌）の部立に、

題しらず 業平朝臣

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消なましものを

として載せられている。

8 疑抄——細川幽齋によって書かれた『伊勢物語けつぎ疑抄』。中世の代表的な『伊勢物語』注釈書。

問1 【文章I】の傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①～③。

(ア) よばひわたりけるを

①

- ① 様子をうかがっていたが
 ② 毎晩のように訪れては
 ③ 暗闇に紛れて忍び込み
 ④ こっそりと通っていたので
 ⑤ 求婚し続けてきたが

- (イ) はや夜も明けなむ
- 2**
- ① すぐには夜も明けないだろう
 ② はやく夜も明けてほしい
 ③ すでに夜も明けただろうか
 ④ いずれは夜も明けるはずだ
 ⑤ もはや夜も明けたころだ

- (ウ) 後のただにおはしける時とや
- 3**
- ① 二条の后がいとこの女御のもとにお仕えしていた時の話だとか
 ② 二条の后がまだ並一通りの美貌であった時の話だとか
 ③ 二条の后が密通事件に巻き込まれる前の話だとか
 ④ 二条の后が天皇の夫人でいらっしやらなかった時の話だとか
 ⑤ 二条の后がご懐妊なさる前の話だとか

問2 【文章I】の波線部a～dの文法的説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は**4**。

- ① a 格助詞 b 形容動詞の活用語尾 c 完了の助動詞 d 過去の助動詞
- ② a 完了の助動詞 b 断定の助動詞 c 接続助詞 d 副助詞
- ③ a 格助詞 b 形容動詞の活用語尾 c 接続助詞 d 過去の助動詞
- ④ a 完了の助動詞 b 断定の助動詞 c 接続助詞 d 過去の助動詞
- ⑤ a 格助詞 b 形容動詞の活用語尾 c 完了の助動詞 d 副助詞

問3 【文章I】のX「白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましもを」の歌の説明として**適当でない**ものを、次の

- ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は**5**。
- ① 上の句と下の句にそれぞれ会話文があり、歌全体が散文的な形になっている。
- ② 「つゆ」は実際の景物であるが、同時に、はかないものたえとして「消え」と縁語にもなっている。
- ③ 希望を強調する「なまし」と詠嘆の「ものを」を組み合わせることで、強い後悔の念が表現されている。

- ④ 「かれは何ぞ」という女の生前の問いを踏まえつつ、ひとり生き残った男の心情が詠まれている。
- ⑤ 「白玉」は女を暗示しており、「白玉」のように大切な人をなせ死なせたのかと男が自らを責める歌である。

問4

【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】の「これは二条の後の」以下の箇所が後人の注記であると考えているが、どうしてそのように考えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **6**。

- ① 『伊勢物語』の作者は、業平の歌を、それが誰の作であるのかまったくわからないように周到に詠み変えており、後段でわざわざ業平の名を出す必要はないから。
- ② 『伊勢物語』の作者は、業平をはじめ、実在の人物の名はすべて伏せており、密通事件の話でだけ、二条の后やその兄弟たちの実名を出すのは不自然だから。
- ③ 注意深い『伊勢物語』の作者が、天皇の夫人である二条の後の密通事件を露見させたり、その兄弟たちの実名を挙げて恥をかかせたりなどするはずがないから。
- ④ 後段の「後の直におはしけるをり」という設定は、業平への気づかいにならないどころか、むしろ二条の后を貶めることになり、執筆者の不手際が明白だから。
- ⑤ 『伊勢物語』が康保年間に成立したとしても、まだ陽成天皇の権勢が盛んな時期であり、作者が藤原氏に都合なことを書くような愚か者とは考えられないから。

問5

【文章Ⅲ】は、「白玉か」の歌が、『新古今和歌集』に業平の作として採られたことについて、どのように考えているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **7**。

- ① 業平の歌であると、どのような書物によって決めたのか不明であるが、業平の家集といったものがあって、それに従ったと見るのが妥当である。
- ② 『新古今和歌集』では「題しらず」の一首として載せられているので、物語の本文に拠ったものであるはずはなく、物語以外のものに拠ったものだろう。
- ③ 「白玉か」の歌の歌風は、業平の歌風らしくなく、物語の歌はすべて、物語の作者が古歌を引用したり、自ら作ったりしたものだと考え、業平の歌としない方がよい。

- ④ 後代の人は皆、物語の「むかし男」を業平と考えていたため、「白玉か」の歌と業平の歌の歌風の違いに気づかず、そのまま業平の作と判断したのだろう。
- ⑤ 「白玉か」の歌は、物語の作者が業平の歌風に似せて作ったものだとして理解していれば、そのまま業平の歌とするような過ちは避けられただろう。

問6 【文章Ⅱ】と【文章Ⅲ】の内容の説明として適当なものを、次の①～⑦のうちから二つ選べ。解答番号は **8**・**9**。

- ① 【文章Ⅱ】は、二条の後の密通事件は事実であるが、もともとの『伊勢物語』には描かれていなかったと考えている。
- ② 【文章Ⅱ】は、二条の後の密通事件そのものが事実ではなく、それが『伊勢物語』に描かれるはずはないと考えている。
- ③ 【文章Ⅱ】は、二条の后が鬼に食われたはずはなく、『新古今和歌集』の撰者も、あえて「題しらず」として、「白玉か」の歌を採ったと考えている。
- ④ 【文章Ⅱ】は、二条の后が鬼に食われたはずはないが、『新古今和歌集』の撰者は、それに気づかなかったと考えている。
- ⑤ 【文章Ⅱ】も【文章Ⅲ】も、『新古今和歌集』の撰者は、「これは二条の后の」以下が注記であることに気づいていたと考えている。
- ⑥ 【文章Ⅱ】も【文章Ⅲ】も、『新古今和歌集』の撰者は、「これは二条の后の」以下の内容には基づかないで、「白玉か」の歌を採ったと考えている。
- ⑦ 【文章Ⅱ】も【文章Ⅲ】も、『新古今和歌集』の撰者が、「白玉か」の歌を哀傷の部に載せたのは、不適切であると考えている。